

社会の変化に主体的に生きる力が育つ社会科学習

— 子供が主体的にかかわる学習問題の具体化 —

柳原小学校 松本 静枝, 北郷小学校 三木 清貴
三重小学校 周東 良美, 山前小学校 慶野 靖典
大月小学校 川崎 等, 三和小学校 森 直樹
葉鹿小学校 藤田 敏子, 小俣小学校 久保 恵子
東 小学校 柏瀬 順一

I. はじめに

本稿は平成8年度第42回栃木県小学校社会科教育研究会で3か年継続研究のうち、第1年次の発表したものの抜粋であるが、足利支部は平成9年度の発表がないため、ここに掲載し研究の軌跡とするものである。なお、指導者は松本、授業者は三木、提案者は柏瀬（本稿責任者）で、文章は上記者による共同執筆によるものである。

II. 研究主題について

本研究主題は、栃小教研の研究の歩みから設定されたものであり、また、社会科学においては、公民的資質の基礎を養うことをいっそう重視し、子供の主体的な活動を通して、これからの変化の激しい社会に自らが考え判断し、主体的に生きていくことができる力の育成をはかることが重要であるという今日の教育界の動向をふまえて設定されたものである。

「主体的に生きる力が育つ」とは、学習の主体者である子供たちが、学習の対象である社会的事象に主体的にかかわりながら、学習活動に取り組むことを通して、ものの見方や考え方を深めたり、それらを表現したりしながら、自ら意欲的に学ぶ態度や考える力、表現する力などが育つようにしていくことである。とりわけ、社会の変化に主体的に生きる力として要求されるのは、考える力や表現する力の育成を図ることであろう。

これまでの栃小教研の研究の所産をふまえながら、問題解決過程を子供の学習状況に即して弾力的にとらえ、より一層子供の側に立ち、主体的な学習を支援し、よさの発揮や伸長を期する必要がある。そこで、3か年の継続研究の第1年目はまず、主体的な学習活動の原動力となる学習問題の設定を、どのように子供の側に立って一人一人の子供に具体的に具体化していったらよいかを研究副主題として研究に取り組むことにより、本研究主題に迫ろうと考えた。

III. 研究内容

1. 問題意識や追究意欲を高め、考える力や表現する力を育てる工夫—子供の側に立った展開構想

学習問題を設定するにあたっては、教師側の願いと子供のもの見方や考え方、学習適性を含めた実態とが噛み合い、学習のねらいが達成されるように行われる必要がある。そこで、子供の考える道筋や学習に対する思いや願いなどから学習活動を構想する。いわゆる子供の側に立った展開構想を工夫する。

2. 学習問題を焦点化・具体化する工夫

子供一人一人の問題意識や追究意欲を高めるためには、互いの予想や仮説を問題と関連させながら考えるようにすることが大切である。また、追究の内容や方法、それを生かす表現の仕方を工夫することも大切である。そこで、学習問題を子供にいかに関心化・具体化させるかを工夫する。

IV. 研究実践

1. 小単元名 **資料で調べる農産物の生産地** (第5学年)

2. 学習指導要領の目標及び内容の分析

本小単元「資料で調べる農産物の生産地」は、社会科第5学年の目標(1)と(3)をふまえて、内容(1)ーアの上に設定されたものである。(学習指導要領は以下省略)

児童は、前小単元「米づくりのさかんな地域をたずねる」や「野菜の生産地をたずねる」において、生産に従事する人々が、生産性の向上や消費者の需要に応え良質な食料生産をするために、工夫や努力をしていることなどについて学習してきた。

本小単元では、国民の食料確保の上での農業の重要性や自分なりの関わり方、これからの農業生産の展望など、生産する人々と自分たちも含めた消費する人々との関連についても触れながら、米・野菜・果物・畜産物の生産分布などを調べさせていきたい。

本小単元においては、田畑の分布や米・野菜・畜産物の生産地や生産量などを、地図・統計などの資料を使って読みとる活動の場が多くある。正しく地図や統計・グラフが活用できるように指導していくとともに、主体的に調べていくように、多様な資料を準備したり自ら資料を収集させたり体験的活動を取り入れたりしたい。また、調べ、まとめる活動においても、効果的に資料が使えるよう工夫させるようにしたい。個別学習、課題選択学習など学習形態についても、考慮していきたい。

それから、資料を読みとっていく中で、米・野菜・果物・畜産物の生産地について、自然条件や交通の様子などと関連づけて考えることができるようにしたい。

日本の農業は、自然環境と深いかかわりをもって営まれていること、耕地利用の多くは水田であること、野菜や果物の生産地は交通の発達や栽培技術の進歩により広がっていることを、地図や資料を使って理解させたい。外国産農産物の輸入により、品質の向上や低コスト化が必要であることなどについても気付かせていきたい。その際、知識の注入にならないで、児童が主体的に学習に取り組めるよう個々に支援していきたい。

3. 児童の実態

(1) 前単元の学習から

前単元で実施した「漁業のさかんな地域をたずねる」の学習では自分の好きなすしだねは何か、そして、それはどこから来るのかということを考えて発表する学習から入った。ほとんどの子供たちは、すしが好きで活発な発表が続いたが意外に外国からきていることに対して驚きの様子を示していた。

遠洋・沿岸・養殖漁業と調べた後、自分の関心のある魚を選び、個人またはグループでその魚の漁場や種類、動きなどについて調べて、新聞やパンフレット、イメージを中心としたまとめに表していった。調べるにあたり、子供たちは、図書室で自分で資料をみつけ、分からないことに対しては教師に積極的に聞いてきた。まとめとして行った発表会では、自分では調べなかった魚の発表を熱心に聞き、疑問に思ったことや分からなかったことなどに対して質問が飛び交っていた。

(2) 診断的評価から

生活経験に関して、「子供たちが日頃よく食べている野菜や果物、肉は何か、それらはどこで作られているか」という問いに対して、野菜ではきゅうり、キャベツ、トマトが多くでてきた。きゅうりについては、

5年の最初の単元で学習した宮崎からと答えた子供がいたが実際には宮崎からは足利市には送られてきていない。ほとんどは関東地方からのものであることを気付いている子供は少なかった。また、キャベツについては、4年で学習した南牧村があがってきたが、地元の栃木県や関東各県をあげた子供も多かった。果物のいちごやりんご、みかんについては、買い物で行ったスーパーにあった箱などから産地をよく知っていた。牛肉については、北海道やアメリカ、オーストラリアなどの外国からたくさん送られてきているという答えが多く見られた。

既習事項の確認で行った南牧村と石垣島の間に対しては、生産されているものとそれらが気候の条件を生かした生産物であるということをよく理解している子供が多く見られた。

教科書や資料集といった基本的な資料を使っての調べ学習は、大変好んでいる。さらに、TVやVTRといった視覚に訴えるものや写真や絵を使って調べていくのも好きである。

調べたことの表現の方法は、5年の社会科学学習を始めてから継続的に行なっているワークシートや図、イラストに表現していくことを好んでいる。

(3) 考 察

自分なりに問題を持って、自分の予想をもとに調べていき、まとめていくといった学習の進め方については理解できている。また、一つ一つの教材で学習したこともほぼ理解できているが、確実に自分のものとなっているとは言えない。

社会的な事実や事象をひとつひとつとらえることができても、その事実や事象の持つ意味について自分なりに考えまとめていたり、自分の生活と結び付けて考えていたりすることは難しい。いくつかの事象を関連づけて考えたり、比較検討していくような大局的な見方や考え方ができる児童は少ない。

資料の活用については、ひとつの資料から社会的な事実や事象を読みとることができても、たくさんの資料の中から適切な資料を選び出したり、2つ以上の資料を同時に利用したりしていくことのできる児童は一部である。

4. 単元（小単元）の展開構想

学習指導要領の目標・内容の分析や児童の実態から、小単元の展開構想を以下のようにとらえた。

(1) 問題意識や追究意欲を高め、考える力や表現する力を育てる工夫

〈子供の側に立った展開構想〉

これからの社会科学学習では、子供自らが学習活動を作っていくという主体的な子供の姿が求められている。そこで子供が主体的にかかわる学習問題という点で考えると、まず学習内容を子供の側からとらえ直し、「子供の論理」から弾力的で柔軟な展開を構想することが大切と考える。子供が社会的な事象にであったとき、興味・関心・考え方、理解の仕方などは多様であるから、様々な子供の活動が考えられる。そのため子供の活動のある制限の中で行わせるのではなく、できるだけ、子供の活動が実現できるように下記のこと留意して、弾力的に展開を進め、個々に応じた適切な支援を行っていきたい。

ア 子供が課題を選ぶ

本単元は、米ときゅうりの学習の後、日本の具体的な主な農産物の生産地を調べるために児童の調べたい農産物を学習課題としていきたい。その時、資料等の制限はあるものの、ふだん食べて身近に感じるものなので、子供が課題を選ぶ範囲は広く、選択に悩むことは少ないと考えられる。しかし身近であることがこだわりにつながり、課題を選択することを難しくするかもしれない。だが、その農産物に対するこだわりがむしろ意欲づけになると考えられる。普段食べている農産物が、生産地をはじめその他

興味のあることを調べることにより、その農産物に対する意識も変わると思われる。子供が自分で課題を選ぶよさがここには表れるであろう。

またいきなり農産物を選ぶのではなく、まず自分の家で食べている農産物の生産地を白地図上で明らかにすることにより、身近なものを日本各地の生産地とのつながりで再認識することにつながると思われる。さらにここでは、その課題を選んだことに対して、教師が認めてあげることも必要である。

イ 子供が学習の方法を選ぶ

学習の方法については事前に子供にアンケートを取ったところ、調べる方法については、全員が持っている教科書や資料集が圧倒的に多かった。他にはビデオや見学もあり多種にわたっているので、ここでは多様な学習活動（調べ方）を用意してやりたい。そのためには資料の準備を重視していき、子供にも事前に入手できる資料や情報を収集させ、効果的な資料選択能力を身につけさせていく。

これらの資料でどれほど内容があるかという問題もあるが、それ以上に自分で資料を選択し、決めることが大切であると考え。自分で決めたことはその子供にとっては、その喜びを感じることに繋がります。問題解決学習にあっては、今後の学習に結び付く体験となるであろう。

ウ 体験的な活動の工夫

本単元では授業中には行わないが、自分で買った農産物の生産地を調べる作業を行う。この作業は普段何気なく食べている物の生産地を意識させ、生産地はどこか確認することにつながると思われる。

エ 問題意識を高める指示の工夫

ここでは前単元で生産地だけでなく、生産の工夫や努力、生産者の工夫、将来の展望等を学習してきている。そのため、農産物を調べる中で、子供の興味は教師側のねらいと異なる方向に進むこともありえる。そこで本単元の中心概念である自然環境を生かした生産活動を調べるように向かわせるため、まず4年生の気候の違いによる人々の暮らしのことを想起させる。その時に「どうして南牧村ではキャベツ作りがさかんなのだろうか。」「どうしてさとうきび作りが石垣島でさかんなのだろうか。」と発問し南牧村と石垣島のことから自然を生かした暮らしを思い出させ、本単元のねらいに迫らせていきたい。

(2) 学習問題を焦点化・具体化する工夫

ア 予想や仮説を持たせるために

学習問題を作るということは、子供一人一人の問題意識の高まりの問題である。子供の立場からみれば、社会的事象にであったとき持つ興味・関心や問題意識はその子供にとってはすべて何らかの価値のある内容をもっている。それを解決していこうとする意欲がまず大切である。

しかしながら、今までは社会とのかかわりをあまり深く考えたことがないため、少しでも自分も社会の一員として様々なかかわりを持って生活しているという意識を持たせたい。そのための手だてとして、子供の実態を生かしたり、子供の持つ問題をまず認めながらの学び合いをすすめさせたりしていきたい。

(ア) 経験や見方を生かした工夫

一人一人の生活経験は異なるので、農産物を調べる上で選んだわけが多様多様にわたることがあっても、それらは選択した理由になることを認めてあげる。食べたときのことが一番の経験となることが多いので、その時の感想が理由になることはもちろん、この地区の実態を考慮すると家で作っていることなども理由としてあてはまる。

(イ) 追究内容を明確にする工夫

既習事項の「南牧村」と「石垣島」のことを想起させることにより、自然環境との関係をとらえさせることができるであろう。またワークシートに調べたいことを書き表すことで、事柄や内容のイメ

ージをより明らかにすることができる。

さらにグループで学習することでお互いに課題を理解し合おうとすることから、その内容の吟味を進めていくことができると思われる。相手の調べたいことと自分の調べたいことの意見を交換し合っ
て、お互いに助け合い、学び合うことができるであろう。

イ 学習問題の具体化を図るために

調べる過程にあって、その手順を明確にするために、まずワークシートで次のようなことを明らかに
させ、学習を進めたい。

1) 学習形態 2) 内容 3) 方法・資料 4) 分担 5) まとめの方

(ア) 手順を明確にする工夫

調べる際の方法・資料は、子供が探したもののほか、図書・統計なども用意し、さらにパソコンも
利用させたい。同じ統計資料でもパソコンを利用することにより、瞬時に地図上で生産地を示すこと
ができ、意欲的に調べ活動に参加すると思われる。パソコンでは40種以上の農産物の主な生産都道府
県(上位3位まで)が入力されており、ほぼ身近なものは網羅されている。そのため全員が触れること
ができ、調べる資料が全然ないということはなくなるであろう。

(イ) 表現の仕方の工夫

新聞やパンフレットを作った経験しかない児童のため、自分の調べたことを表現していくにあたり、
ワークシートに表現の仕方の例を挙げたり、実物を見せたりした。この機会にイメージを中心とした
まとめ方や物語、すごろくなどもやらせてみたい。

5. 小単元の目標と評価規準

(1) 小単元の目標

私たちの食べている農産物や畜産物などの生産地について関心をもち、教科書やその他の資料、JAやお
店への取材を通して調べ、自分なりに表やグラフ・図などに表すことにより、わが国の農畜産物の分布や
耕地利用の様子を読み取ることができる。また農産物の生産では、自然環境と深い関わりをもって営まれ
ていることに気付くことができる。

(2) 小単元の評価規準(評価の観点)

(社会的事象への関心・意欲・態度)

- ・私たちの食生活に欠かす事のできない農畜産の産地に関心をもち、調べようとする。
- ・農畜産物の産地について、疑問に思ったことを自分なりに調べようとする。

(社会的思考・判断)

- ・農畜産物の分布から、自然環境や社会条件との深い関わりを考えることができる。
- ・わが国の農畜産物生産について、自分なりの考えをもつことができる。

(観察・資料の活用の技能・表現)

- ・おもな農畜産物の生産地について、自分なりの方法で地図などに表すことができる。
- ・分布図やグラフを使って、田畑の分布や土地利用の様子を読み取ることができる。

(社会的事象についての知識・理解)

- ・自然環境を生かして、米、野菜、果物や畜産物の生産をしていることがわかる。
- ・耕地の多くが水田であることがわかる。

6. 小単元の基本的な展開計画と評価計画（表1）

7. 本時の指導（2/7時）（表2）

8. 対象児の活動の様子と教師の支援（本時の詳細と対象児Cについては省略）

（A児）1. 選んだ課題 とうもろこし

2. その農産物を選んだ訳

- ・とうもろこしを育ててみたことがあるが、最後まで育てたことがないから。
- ・どのように出荷するのか知りたいから。
- ・とうもろこしが好きだから。

3. 学習形態 個人 4. まとめの方法 新聞

5. 活動の様子と支援

「とうもろこし」を課題に選んだが、教科書や資料集にも全く出ておらず、まず自分の力で資料が見つからないので「もっと、資料が自分の力で見つかりやすいものを選べばよかった。」と選んだことを後悔していた。

そこでまず、とうもろこしの生産量ベスト3が出ている統計資料とそれを日本地図に表したものを資料として与えた。さらに、いろいろな野菜が出ている図鑑を与えた。

自分の考えた調べる内容にしたがって、新聞の形に調べたことを表現し始めた。どこでたくさん生産されているかということ調べるうちに外国（特にアメリカ）からの輸入が多いことに気づいた。なぜ、そこでたくさん生産されているかについては、資料で調べることができず、教師にアドバイスを求めてきた。両親にも聞いてみたが分からないと言うことなので、アメリカでとうもろこし作りがさかんなところのことを話してやると、それを基に自分でその場所の気温と土地の広さが大きく関係しているのではないかという予想を持つことができた。

（B児）1. 選んだ課題 牛肉

2. その農産物を選んだ訳

- ・どこで生産されている牛肉がおいしいか知りたいから。
- ・牛肉はどうやって取引しているか知りたいから。

3. 学習形態 グループ（2人） 4. まとめの方法 すごろく

5. 活動の様子と支援

自分で事前に資料を見つけておき、「牛肉」を課題に選んだ。初めは1人でやろうとしていたが、今までのことを考えてみるとまとめが苦手なのでだれかと一緒にやってみたらと助言すると少し考えたすえ、まとめがいつもきちんとしてくれる子と2人で一緒にやることにした。

調べが始まるとすごろくの枠作りに時間がかかり、あまり能率良く進まなかった。自分たちの住む栃木県から京都府まで牛を運ぶすごろくにした。すごろくは後で楽しむのにはいいが、まとめとしてはちょっと書きづらいことをやりながらもらっていた。

牛肉の生産量ベスト3が出ている統計資料とそれを日本地図に表したものを資料として与えた。生産量の多い所が北海道と九州の鹿児島や宮崎なので、寒い所でも暖かい所でも作っているのに特に気候とようすとはあまり関係なさそうだと2人で話していた。とすると、牛を育てるのには広い土地があって、牛が食べる草がたくさん生えている所が必要なのではという考えが浮かび、土地の広さが関係するのではないだろうかと考えを導き出した。

表1 6. 小単元の基本的な展開計画と評価計画

(総時数 7時間)

学習過程	時間	主 な 学 習 活 動	資 料	教 師 の 支 援	主 な 評 価
つかむ・見通す	1	1. 自分たちが食べている米や野菜・くだもの生産地を調べ、白地図に表す。 2. 白地図に表された生産地の分布から、日本の主な農産物の生産地を調べてみようという意欲を持ち、学習問題を設定する。 日本 <small>の</small> 農産物は、どこでさかんに作られているのだろう。	○各自持ち寄った米や野菜・くだもの生産地名の入った袋やダンボール ○白地図（日本全図）	○ 自分の食べている農産物の生産地について、前もって調べておくようにし、本時に、その生産地名の入った袋やダンボールなどを持ってきてくように言う。	○ 自分の食べている農産物の生産地調べの資料を持ち寄ることができる。 (関：資料や聞いてきたこと) ○ 農産物の生産地の分布を白地図にまとめることができる。(技：白地図)
	2	3. 農産物の中から、自分で調べたいものを選びそれを学習課題とし、学習計画を立てる。 ○ 学習課題の設定(設定の理由・調べる内容) ○ 学習形態の決定(個別・グループ) ○ 調べる内容・方法・分担・表現方法などの決定	○ワークシート(学習計画表)	○ 自分の学習課題の根拠や何を調べたいか、どのように調べるのかなど、調べる計画が立てやすいように、ワークシートを工夫する。 ○ 調べるものや児童の実態等を考慮して、個別学習かグループ学習かを助言する。 ○ 調べる内容が、本単元のねらいを達成できやすいものになるよう助言する。	○ 自分の調べたい農産物を選び、学習計画を立てることができる。 (関・技：ワークシート)
調べる	3	1. 資料をもとに、調べる。	○ワークシート ○各自で持ち寄った資料 ○教師が準備した資料	○ 一人一人の選んだ農産物の資料が適切に選ばれたかどうか確認する。教師も、前もって、児童の選んだ農産物の生産地や生産量について、統計年鑑等で調べておき、どうしても資料の無い児童に支援できるようにしておく。 ○ 表現方法などは、児童の意欲を尊重するが、より友達にわかりやすい表現にすることや時間内に終わすことなどを助言する。	○ 自分の調べる計画に沿って、農産物の生産地を調べることができる。 (関・技：持ち寄った資料・観察) ○ 自分なりの方法で、調べたことをまとめることができる。(思・表：各自がまとめた作品)
	4	2. 調べたことを絵や地図、表やグラフなど、見やすい方法でまとめる。			
まとめる	5	1. 調べたことを発表し合う。	○各自がまとめた作品 ○まとめ用のワークシート	○ 発表する人は、農産物の生産地やそこでさかんに作られるわけ等(自然条件との関わり等)を、友達にわかりやすく説明するよう助言する。 ○ 聞く人は、友達の発表から、自分の調べていない農産物の生産地や自然条件の関わり等をよく聞いて、日本の主な農産物の生産地についてまとめよう、助言する。	○ 自分のまとめた作品をもとに、調べたことを発表することができる。 (関・思・表：発表) ○ 自分で調べたことや友達の発表から、日本の主な農産物の生産地についてまとめることができる。(思・知：ワークシート)
	6	2. 友達の発表を聞いて、自分で調べた農産物以外の生産地についても分かり、日本全体の農産物の生産地についてまとめる。			
7					

表2 7. 本時の指導 (2/7時)

ア 問題 日本 の 農産物 の 生産地 を 調べる 計画 を 立て よう。
 イ ねらい 日本 の 農産物 の 中から、自分 で 調べたい 物 を 選んで 自分 の 学習 課題 と し、 学習 計画 を 立て る こと が でき る。
 ウ 展開

具体目標	学習活動	教師の支援	評価	資料・準備
○ 前時の学習内容 と、本時からの共通の学習問題を 確認できる。	1. 前時の学習内容を振り返り、 本時からの共通の学習問題を確 認する。 日本の農産物は、どこでさ かんに作られているのだろ う。	・ 前時に作成した白地図を掲示し、前時の学習内 容を振り返らせる。 ・ 本時からの共通の学習問題を提示し、確認し合 う。	・ 本時からの共通の学習問題に興味や関心を示す。 (関・意・態) → 観察	・ 前時に作成 した白地図 ・ 学習問題
○ 自分の学習課題 が設定できる。	2. 農産物の中から、自分で調べ たいものを選び、それを自分の 学習課題とする。	・ 学習課題が設定できないうちには、前時の学習 内容を想起させながら、他にどんなものが考えら れるか、教師が例示するなどして援助する。	・ 自分の学習課題を設定すること ができる。 (関・意・態) → 観察, 学習計画表	・ 学習計画表
○ 学習課題を發表 し合い、学習形態 を決めることができ る。	3. 自分の選んだ学習課題を發表 し、学習形態を決める。	・ 調べる内容を決めるに当たっては、生活経験や 既習事項などをとくに、決定するよう助言する。 ・ グループ構成の際には、人数等を考慮して決定 できるよう援助する。	・ 学習課題を發表し合い、学習形 態を決めることができる。 (関・意・態) → 観察, 發表	
○ 今後の学習の計 画が立てられる。	4. 自分の立てた学習課題に沿っ て、学習の計画を立てる。 (1) 調べる内容 (2) 調べる方法 (3) 調べる分担 (4) 表現方法 その他	・ 進んで学習の計画を立てている児童には、励ま しの言葉をかける。 ・ なかなか計画の立てられない児童やグループに は、調べる内容や方法について助言する。 ・ 調べる内容を決めるに当たっては、農産物の生 産地と自然条件との関係について目を向けるよう 助言する。 ・ 調べる方法については、あらかじめ教師も資料 を準備しておくことを知らせる。 ・ 表現方法については、学習計画表にいくつか表 現手段を記入しておき、選ぶ際の参考にさせる。	・ 意欲をもって、調べる内容や表 現の仕方などの計画を立てること ができる。 (関・意・態) (技・表) → 観察, 学習計画表	
○ 次時の学習内容 が分かる。	5. 次時の学習内容を知る。	・ 次時は、各自が立てた学習計画に沿って調べて いくことを知らせる。		

10. 考 察

(1) 問題意識や追究意欲を高める支援の在り方について

本単元では第1時に身近な農産物の生産地についての白地図を作った。この白地図は、最も児童の実態を表したもので、これを基に授業を進めようと考えた。この中で、生産地は関東地方に集中しつつ、全国にわたっていたが、対象児Aは前者には気づいたが、後者については「北に偏っている」との旨の発言をした。他の対象児はいずれも発言していない。

この白地図では、農産物が全国で生産されていることから、「他に盛んなところはないだろうか。もっと詳しく調べよう。」と言う問題意識を高めさせる教材としたかった。しかしながら、農産物の集中の様子に子供たちの意識は移ってしまったようだ。

またこの白地図を活用するにあたっては、子供の意識のずれを利用する方法が考えられる。例えば、きゅうりなどは近郊で採れているが、教科書では宮崎が生産地としてあげられている。自分の食べているものの生産地が常に上位生産地ではないことを気づかせ、他の物ではどうだろうか、そしてどうしてだろうかと思わせることが必要であったであろう。

子供が調べたい農産物については多種にわたったが、すべてについての統計資料がそろっていたため、子供に対して不安を与えずにすんだ。しかしとかく統計資料は利用の仕方が単純で、その数を写すだけの作業が多かったため、本単元ではパソコンを利用し生産地のビジュアル化を図った。これにより①生産地 ②生産量 ③順位などで子供たちが資料に活用しやすくなった。

対象児Aは資料が少ないトウモロコシを調べ、その中で年度の異なる統計資料からまとめ、「気温と面積の関係」から生産されていると推測している。対象児Bは資料から北海道に多いことに気づき、北海道の自然条件から牛の生産が多いことをすごろくの中に書き入れている。さらに対象児Cは、地図から米の生産地が北に偏っていることに気づいている。

このように資料内容の程度はあれ、本単元のように選択範囲が広い場合は、最低必要なデータをすべてそろえ、さらに統計資料のような数字はビジュアル化を図り利用しやすいものにするすることで、子供たちの意欲に対応することができたと考える。

(2) 今回の学習を通して、子供たちは自分との関わり（生活経験）や興味・関心などから自分の課題を見つけ、ある程度の見通しを持って意欲的に取り組む姿が見られた。

しかし、子供たちそれぞれの関心を示すところは様々で、調べてみたい内容も多岐にわたり、その内容が単元をつらぬくような質の高い課題もあれば、なかなか解決できそうにないものや、道をそれてしまうおそれのある課題もあった。

そこで子供の願いや思いを大切にしながら、子供の追究意欲をなくさないようにし、指導のねらいにそような支援をしたことにより、指導のねらいと学習課題が徐々にかみ合うようになっていった。

V. 研究の成果と今後の課題

1. 研究で明らかになったこと

今回の「子供が主体的にかかわる学習問題の具体化」の研究では、児童の意欲を高める教材の提示と自らが問題意識を持ち、調べ、追究していく学習過程にポイントをおいて研究を進めた。その中で明らかになったことは、次のようなことである。

ア 自分たちの日常生活と密着した農産物について白地図にまとめたことは、意欲的に課題を追究する手がかりになった。

イ 児童一人一人が自分の課題をつくり追究していったが、不十分な点など教師が補ったりアドバイスしながら、自然な形で軌道修正が行われ、「その子のよさ」を生かした支援の一步となった。

2. 夏季大会で討議してほしいこと

ア 学習問題を焦点化していくために白地図作りをさせたが、ねらいに沿った効果的な問題づくりをするための教師の支援のあり方はどうあればよかったか。

イ 児童の「よさ」を生かしたグループ編成のあり方

3. 今後の課題

指導のねらいと子供のよさを生かした学習問題とのかみ合いを考慮した支援のあり方。

VI. おわりに

平成9年度より栃木県小学校社会科教育研究会県内支部の割り当てが変わり、次回の足利支部発表は平成10年度となった。毎年行われていた大会発表にブランクが生じることとなり、今回のように3ヶ年の研究の場合には支障があると思われる。本発表資料は各校社会科主任を通じ配布されているので、詳細はそれを参照していただきたい。

最後になりますが、本研究をまとめるに当たり、会場を提供していただき、研究の細かいところまで気を配っていただいた足利市立北郷小学校の岡本弘校長をはじめ関係各位に対し心から感謝を申し上げます。

社会科の学習において求められることは、子供が自分で問題や課題を見つけ、自ら考え判断しながら自ら解決していく資質や能力を身に付けるとともに、問題解決の喜びを実感できるようにすることであるといわれています。単に過去の知識を記憶しているということではありません。特に問題解決能力は、身近な生活や学習の中で初めて遭遇する課題や場面において、様々な情報の中から必要とする情報を取捨選択しながら、主体的に考え、解決策を築き上げていく力です。第15期中教審第一次答申ではこれを「生きる力」の重要な要素と規定しています。

これからの社会科の授業づくりにおいては、「生きる力」としての問題解決能力を育てる観点から、子供が主体的に取り組む学習活動を展開することが課題となっていると考えられます。そのためには、子供一人一人が自らの問題を発見し、主体的に追究していこうとする場面の指導を一層重視し、子供の主体的な問題発見をうながす指導が大切となります。

本研究は、このような課題を受けての研究実践であり、次のような特色がみられます。

1 子供一人一人の問題意識を高める工夫

学習問題は、社会的事象の観察や資料の活用などの活動を通して把握した事実や、具体的活動、体験などに基ついて生み出されてくるものです。本研究では、自分たちの生活と密着した農産物について白地図にまとめる活動の場を設けることにより、子供たちの疑問や問題意識を高めようと工夫され、また子供の思いや願いを大切にしながら指導のねらいにそのような支援の工夫がみられます。

2 問題解決への見通しをもたせる工夫

子供一人一人が自立して問題解決に取り組むためには、「自分の予想を調べるために、自分はどのようなことをどのような方法でしらべるか」という解決への見通しをもたせることによって、子供の問題意識が一層具体化してきます。児童の実態を踏まえ、ワークシート（学習計画表）を工夫し、どんな学習形態で、どんな内容を、どんな資料や方法をつかって、どういう分担で、さらにはどんな表現方法でまとめるか手順を明確にして取り組ませています。

社会科の学習においては、自分はどんな疑問や問題を明らかにしていきたいのか、なぜそれに取り組むのかなど、子供の問題意識を醸成すること。そして問題解決への見通しをもたせることは、重要なことです。本研究は、このような点で大いに参考になると思われれます。

今後とも研究を継続され、実践を積み重ねて更に研究が深められることを期待します。